

義寂積義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1)

金 炳坤・桑名 法晃

I 序言⁽¹⁾

玄奘(602-64)の門人とも義湘(625-702)の徒弟とも謂れ、唐の汾陽や新羅の金山寺において活躍したことが知られる釈者義寂、そして詳細不明の撰者義一、この二人の書き手によって著された『法華經論述記』(以下、『述記』)は、海東初期の法華教学の様子を伝える貴重な文献であると同時に、現存する数少ない『妙法蓮華經優婆提舍』(以下、『法華論』)末註の一つとして、東アジア仏教における同論の展開を論ずる上で欠かせない資料である。

現在、京都大学附属図書館が所蔵する『述記』のテキストは、その奥書に「元禄十六年歲次癸未五月二十五日脩補／元本卷本今爲折本 釋氏昇謹書」とあるように、1703年に修補した旨を伝えるが、実際は単なる修補に止まらず、元の卷子本から新たに折本(但し実物は袋綴、以下、甲本・K)へと改められたことが記される。

この甲本は1912年に『大日本統藏經』(第1輯第95套第4冊、以下、『統藏經』・D)に収録され、この版本が1979年に『韓国仏教全書』(第2冊、以下、『韓仏全』・H)に、また1984年に『新纂大日本統藏經』(第46巻、以下、『新統藏』・X)に再録されることになるが、再録の版本はいずれも甲本を参照する手間を省いている。ただ『韓仏全』は独自の校勘記を有するため、資するところが少ない。

本研究では、以下に詳述する『述記』の新出資料を用いて、本書の校訂テキスト並びにそれに基づく訓読訳を提示する。

II 校訂テキストについて

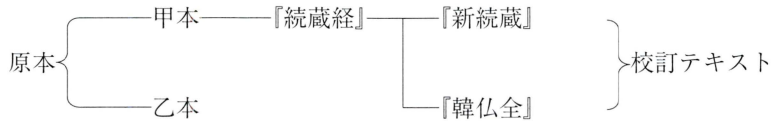
2011年に発行された、宮内庁正倉院事務所編『聖語藏經卷：宮内庁正倉院事務所所蔵：甲種写經二』のなかに「第5類 甲種写經 第81号 法華略記 No.1986」という題を以て収録されている卷子本(以下、乙本・S)が『述記』であることを知ったのは、新たな『法華論』末註として最近注目を集めている円弘の『妙法蓮華經論子注』(以下、『子注』)の研究で著名な金天鶴博士のご教示があったからである。

1紙30行詰めで29紙を有する乙本は、第1紙の始めより10行を欠き、終わりは第29紙の28行目に「縛 二有慧方便解 無慧」と、未完のまま途中で終わっている甲本の末尾とまったく同じ箇所まで終わっている。それゆえ、首尾不完全な乙本に識語は見当たらない。外題に『法華略記』とあるのはこのためであろうが、乙本が現行の『述記』であることは多言を要しない。

さらに乙本は、その終わり方といい、誤字・脱字などの相似といい、甲本の原本ないしは甲

本の原本と同じ系統のものに依っていることは疑う余地もない。但し、甲本の原本と乙本の先後関係や、どちらかが直にみていたという可能性については、比較資料の皆無のため不明とせねばならない。

これまで述べてきた『述記』の5種のテキストの系譜を図式で示すと以下のとおりである。



従来の研究では、テキストを使用するにあたり、甲本に立ち返ることなく、もっぱら甲本をルーツとする『続蔵経』あるいはその再録である『韓仏全』・『新続蔵』に依っていたのが現状である。しかし、文献本来の意趣を十分に把握するためには、それだけでは事足りない。しかも乙本の出現により、より完全なテキストの製作が可能になった以上、次の段階へと研究を進めていくためには、必然的に校訂テキストの製作が求められるのである。

従って本研究では、本書の校訂テキストを製作することを第一に掲げ、首尾を完備する甲本を基準とし、対校本として乙本を用いて、本書の校訂テキストを製作すると同時に、諸版本を校合して、『続蔵経』の読み違いや、基本的には『続蔵経』の読みに従っているが、時折誤植がみられる『韓仏全』・『新続蔵』の不備についてもこれを是正すること。そして第二に、この校訂テキストに基づく訓読訳を提示し、本書の文献学的研究の完全を期すること。この2点を研究課題に掲げる。

Ⅲ 校訂テキストと訓読訳

本稿では、『述記』における『法華論』の「七種功德成就」の第一「序分成就」に対する注釈までの校訂テキスト並びにそれに基づく訓読訳を提示する。該当箇所の科文は下記のとおりである。

〔凡例〕

1. 〔校訂テキスト〕には、見出しの科文ごとに、甲本 (K. 1r-60v)・乙本 (S. 1r-29r)・『続蔵経』 (D. 705a-733a, 新文豊出版)・『韓仏全』 (H. 300c-320b)・『新続蔵』 (X. 779c-793c) の頁を記した。
2. 〔校訂テキスト〕・〔訓読訳〕の字体は、原則として正字を用いた。〔校訂テキスト〕の句点は意味に従って施し、注は該当箇所の最初に付した。下線は経論章疏からの引用・類似文例を示し、その原文を注に記した。〔訓読訳〕には、便宜上^[5-A-2-4]などの科文番号を付

した。

3. 甲本の、書写あるいは蔵經収録に際して行われたものと思われる校勘の痕跡は、〔校訂テキスト〕上に傍点を付し、踊り字は開いて記した。乙本の、添字（上下の字の間に脱字を挿入する場合）、衍字（字の右に：点）、誤字（字の右に正字）などの訂正と、朱筆による校正は、注に記した。
4. 『述記』所引の『法華論』との異同を明らかにするため、注に記した『法華論』の原文は、菩提留支等訳の二卷本（以下、「留支訳」）を用い、必要に応じて勒那摩提等訳の一卷本（以下、「摩提訳」）を併記した。

〔科文〕

1. 釈名	5-A-1. 解云①・開列章門
2. 論主	5-A-1-1. 総開
3. 伝訳	5-A-1-2. 別列
4. 敬序	5-1-1. 論曰②・序分成就
4-1. 初一頌	5-A-2. 解云②・随釈章門
4-2. 次一頌	5-A-2-1. 牒章総標
4-3. 後一頌半	5-A-2-2. 徴数別列
5. 釈経	5-A-2-3. 指事顕義
5-1. 論曰①・七種功德成就	5-A-2-4. 牒経重成

1. 釈名

〔校訂テキスト〕(K. 1r1-1v5・S. 1r11-14・D. 705a1-15・H. 300c5-301a1・X. 779c7-21)

(2)法⁽³⁾花^華經論述記⁽⁴⁾妙法蓮*花^華經優⁽⁵⁾婆提舍者。妙法蓮*花^華經。是所釋經本名。優婆⁽⁶⁾提舍。釋論名也。所釋經本義要有二。⁽⁷⁾一開方便門。二示眞實相。眞實相者。謂證道也。方便門者。謂教道也。此二種道。並⁽⁸⁾兩甚深。⁽⁹⁾回軌⁽¹⁰⁾毘義。故名妙法。言蓮*花者。喻顯妙法。出離十慢之濁。開敷一乘之實。故譬蓮*花。又蓮*花者。寄譬別顯法功德。此經所顯。方便眞實。各有二種。謂法與人。法謂妙法功德。當體立名。名爲妙法。人謂法師功德。寄喻顯示。名⁽¹¹⁾爲蓮*花。義如上釋。優婆提舍。名爲⁽¹²⁾論議。即十二分中。論議理也。亦名摩怛理⁽¹³⁾伽。言勒伽者。音之略也。⁽¹⁴⁾解釋經文。研究深義。是故名爲優婆提舍。依所釋經。立論名故。是依主釋。⁽¹⁵⁾或此論中。攝法花經所有要義。名藏。

〔訓読訳〕

『法花經論述記』

『妙法蓮花經優婆提舍』とは、『妙法蓮花經』は、是れ所釋の經の本^{もと}の名、「優婆提舍」は、

釋論の名なり。

所釋の經の本の義要に二有り。一には、方便の門を開き、二には、眞實の相を示す。眞實の相とは、謂わく、證道なり。方便の門とは、謂わく、教道なり。此の二種の道、並びに兩甚深は、軌闔す回きの義なり。故に「妙法」と名づく。

「蓮花」と言うは、妙法を顯わすを喩う。十慢⁽¹⁶⁾の濁を出離し、一乘の實を開敷す。故に蓮花に譬う。又た蓮花とは、譬に寄せて別して法の功德を顯わす。此の經の顯わす所の方便・眞實に、各おの二種有り。謂わく、法と人なり。法は、妙法功德を謂う。當體もって名を立つ。名づけて妙法と爲す。人は、法師功德を謂う。喩に寄せて顯示す。名づけて蓮花と爲す。義は上に釋するが如し。

「優婆提舍」は、名づけて論議と爲す。即ち十二分[教]中の、論議の理なり。亦た摩怛理伽⁽¹⁷⁾と名づく。勒伽と言うは、音の略なり。經文を釋し、深義を研究す。是の故に名づけて優婆提舍と爲す。所釋の經に依りて、論名を立つるが故に。是れ依主釋なり。或いは此の論の中、『法花經』所有の要義を攝す。藏と名づく。

2. 論主

[校訂テキスト] (K. 1v5-8・S. 1r14-16・D. 705a15-17・H. 301a1-4・X. 779c21-23)

⁽¹⁸⁾婆藪槃豆。⁽¹⁹⁾眞諦翻云天親。⁽²⁰⁾其人⁽²¹⁾本是天⁽²²⁾帝之弟。故名天親。沙門玄奘翻爲世親。菩薩託生於世。因祈世親之天。故爲名焉。

[訓読訳]

婆藪槃豆は、眞諦、翻じて天親と云う。其の人、本是れ天帝の弟なり。故に天親と名づく。沙門玄奘、翻じて世親と爲す。菩薩、世に於いて託生し、世親の天を祈るに因る。故に名を爲す。

3. 伝訳

[校訂テキスト] (K. 1v8-2r2・S. 1r16-18・D. 705a17-b1・H. 301a4-7・X. 779c23-780a1)

⁽²³⁾此⁽²⁴⁾論二本。一是勒那摩⁽²⁵⁾提所翻。無歸敬頌。二是菩提⁽²⁶⁾流支所翻。有歸敬頌。文句小異。義意無別。今所釋者*流支翻也。

[訓読訳]

此の論に二本あり。一には、是れ勒那摩提の所翻なり。歸敬頌無し。二には、是れ菩提流支の所翻なり。歸敬頌有り。[二本は]文句小しく異なるも、義意に別無し。今、釋する所は、流支の翻なり。

4. 敬序、4-1. 初一頌、4-2. 次一頌、4-3. 後一頌半

[校訂テキスト] (K. 2r2-3v6 · S. 1r18-2r13 · D. 705b2-706a13 · H. 301a8-c1 · X. 780a2-b7)

致敬序中。大分爲三。⁽²⁷⁾初一頌。通敬三寶。⁽²⁸⁾願釋經意。次一頌。別敬教主。及對揚衆。⁽²⁹⁾顯造論意。後一頌⁽³⁰⁾半。總歸勝緣。請承加護。⁽³¹⁾頂禮者。⁽³²⁾起⁽³³⁾淨心轉愛果。舉體⁽³⁴⁾頂禮也。正覺海者。謂佛菩提廣大深一味具德。名正覺海。淨法者。⁽³⁵⁾謂⁽³⁶⁾證教法。並皆離垢。上⁽³⁷⁾名爲淨法。無爲僧者。賢聖衆。皆以無爲與同名故。名無爲僧。就勝唯取登地菩薩。下二句者。*顯釋經意。又可*顯示敬之所爲。禮三寶者。爲何所爲。⁽³⁸⁾爲深利智者。開示毗伽典故。深智者。謂⁽³⁹⁾迴向菩提聲聞。得無漏慧。達⁽⁴⁰⁾因性故。利智者。謂新發意菩薩。直趣菩提。非迂迴故。爲斯二人。說一乘法。開者。直說而開。示者。委曲而示。又開者開權。示者⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾示圓。教滿理圓。名毗伽典。如涅槃⁽⁴³⁾槃經云。⁽⁴⁴⁾長者教子。先以半字。後毗伽。謂其義相似。彼經半字。喻於小乘。毗伽羅論。喻⁽⁴⁵⁾大乘故。何者名爲毗伽論。⁽⁴⁶⁾劫初成時。摩醯首羅。與毗⁽⁴⁷⁾糠劍。和合生子。名婆藍摩。彼有四面。說四皮陀。頂上一頭。說一皮陀。四面所說。並是世法。頂上所說。語深難解。世所行者。唯四皮陀。後人更作六種論。解四皮陀。毗伽羅論。即是六論之一也。⁽⁴⁸⁾解阿闍皮陀。辨⁽⁴⁹⁾聲明法也。阿闍皮陀者。是後面所說也。西方重此聲明。故經十二年。乃有通解。非初⁽⁵⁰⁾學者之所能解⁽⁴⁶⁾。故以毗伽。喻大乘也。⁽⁵¹⁾祇⁽⁵²⁾虔牟尼尊者。謂適敬於牟尼尊也。前敬佛中。雖通敬禮。而教主故。須別敬也。及菩薩聲聞者。謂文殊彌勒舍利子等對揚衆也。前禮僧中。雖六通禮。而對揚故。須別敬也。下二句者。*顯造論⁽⁵³⁾意。又二*顯示列教所爲。欲令以法自他利故。略出⁽⁵⁴⁾毗經勒伽論也。摩德勒名爲本母。以能*顯了⁽⁵⁵⁾源隱之義。如字之本母。名摩德勒伽。⁽⁵⁶⁾若正應云。摩怛理伽。今存略故。名勒伽論。後請加護。如文應⁽⁵⁷⁾知。上來敬序⁽⁵⁸⁾已訖。

[訓読訳]

敬序を致す中、大分して三と爲す。

[4-1] 初めの一頌は、通じて三寶を敬い、釋經の意を願う。

[4-2] 次の一頌は、別して教主及び對揚衆⁽⁵⁹⁾を敬い、造論の意を顯わす。

[4-3] 後の一頌半は、總じて勝緣に歸し、加護を承するを請う。

[4-1] 「頂禮」とは、『雜阿毘曇心論』に「淨心の愛果を轉すべきを起こし、體を舉げて頂禮するなり」と。「正覺海」とは、佛の菩提の廣大なる深き一味の徳を具するを謂う。正覺海と名づく。「淨法」とは、證[道]・教[道]の法を謂う。並びに皆な離垢す。上は、名づけて淨法と爲す。「無爲僧」とは、賢聖衆⁽⁶⁰⁾、皆な無爲と同名なるを以ての故に、無爲僧と名づく。勝に就いて唯だ登地菩薩⁽⁶¹⁾のみを取る。

下の二句は、釋經の意を顯わす。又た敬の所爲を顯示す可し。三寶を禮するは、何の所爲と爲すや。「深・利智者の爲めに、毗伽典を開示する」が故に。深智者は、迴向菩提聲聞を謂う。無漏の慧を得、因性に達するが故に。利智者は、新發意菩薩を謂う。直ちに菩提に趣

き、迂迴するに非ざるが故に。斯の二人の爲めに、一乗の法を説く。「開」とは、直説にして開、「示」とは、委曲にして示なり。又た「開」とは、權を開き、「示」とは、實を示す。教滿じて理圓かなるに、毗伽典と名づく。『涅槃經』に云うが如し、「長者、子を教うるに、先に半字を以てし、後に毗伽[羅論を以てす]」と。其の義に相似するを謂う。彼の『涅槃經』の半字は、小乗を喩え、毗伽羅論⁽⁶²⁾は、大乘を喩うるが故に。何者か名づけて毗伽[羅論と爲すや。劫の初めて成ずる時、摩醯首羅と毗糞劍、和合して子を生む。婆藍摩と名づく。彼に四面有り、四皮陀⁽⁶³⁾を説く。頂上の一頭にて一皮陀を説く。四面の所説は、並な是れ世法。頂上の所説は、語深く解し難し。世に行ずる所は、唯だ四皮陀のみ。後の人、更に六種の論を作り、四皮陀を解す。毗伽羅論は、即ち是れ六論の一なり。阿闍皮陀を解し、聲明の法を辨ずるなり。阿闍皮陀とは、是れ後面の所説なり。西方に此の聲論を重ねるが故に十二年を^ふ經。乃ち通解有り。初學者の能く解する所に非ず。故に毗伽[羅論]を以て大乘を喩うるなり。

^[4-2]「^{まさ}祇に^{うやま}牟尼尊を^{もつば}虔う」とは、謂わく、適ら牟尼尊を敬うなり。前に佛を敬う中、通じて敬禮すと雖も、而も教主なるが故に、須らく別して敬うべきなり。「及び菩薩・聲聞」とは、謂わく、文殊・彌勒・舍利子等の對揚衆なり。前に僧を禮す中、六通の禮⁽⁶⁴⁾ありと雖も、而も對揚なるが故に、須らく別して敬うべきなり。

下の二句は、造論の意を顯わす。又た[下の]二[句]は、教の所爲を列するを顯示す。法を以て自他を利せしめんと欲するが故に、略して此の經の勒伽論を出だすなり。摩德勒[伽]は、名づけて本母⁽⁶⁵⁾と爲す。能く源隱の義を顯了するを以て、字の如く、之れ本母なるに、摩德勒伽と名づく。若し正しくは應に摩怛理伽と云うべし。今は略を存するが故に、勒伽論と名づく。

^[4-3]⁽⁶⁶⁾…後は加護を請う。文の如く、應に知るべし⁽⁶⁶⁾。上來の敬序、已に訖る。

5. 釈經

〔校訂テキスト〕(K. 3v6-4r7・S. 2r13-2l・D. 706a14-b4・H. 301c2-14・X. 780b8-16)

自下正釋經文。即⁽⁶⁷⁾是論之正體。若依此⁽⁶⁸⁾論科經文者。大分爲三。一者七種功德成就。名教起因緣分。即初序品是。二者五分破二明一。開方便分。⁽⁶⁹⁾須方便品是。三者對治十無上。*顯實相分。譬喩*已⁽⁷⁰⁾下。至於經竟。流通之分。第十無上中。通攝故不別立。釋初品中。先牒初二分。⁽⁷¹⁾纏⁽⁷²⁾第^三分經。不盡牒者。文隱難解。牒而釋之。相⁽⁷³⁾顯易⁽⁷⁴⁾知。皆在略故。⁽⁷⁵⁾如是我聞等。雖不別釋。文少故并牒。⁽⁷⁶⁾…經曰歸命等者。結集經者。將欲出經。故先歸命。一切經⁽⁷⁷⁾者。理應皆有。無者存略⁽⁷⁶⁾。

〔訓読訳〕

自下は、正しく經文を釋す。即ち是れ論の正體なり。若し此の論に依りて經文を科せば、大分して三と爲す。

^[5-1]一には、「七種功德成就」。「教起因縁分」と名づく。即ち初めの「序品」是れなり。

^[5-2]二には、「五分破二明一」。「方便分」を開く。須らく「方便品」是れなるべし。

^[5-3]三には、「對治十無上」。「實相分」を顯わす。「譬喩[品]」已下、經の竟わりに至る。

流通の分は、第十無上の中、通じて攝するが故に別立せず。

初めの品を釋す中、先に、初めの二分⁽⁷⁸⁾を牒し⁽⁷⁹⁾、⁽⁷⁹⁾第で、⁽⁷⁹⁾三分の經を纏む。牒し盡くさずんば、文隱れ解し難し。牒して之を釋せば、相顯われ知り易し。皆な略在るが故に。

「如是我聞」等は、別して釋せずと雖も、文少なきが故に並びに牒す。

「經曰歸命⁽⁸⁰⁾」等とは、集經者、將に經を出ださんと欲するが故に、先に歸命を結ぶ。一切經は、理應に皆な有るべし。無きは略を存す。

5-1. 論曰①・七種功德成就（教起因縁分）

[校訂テキスト] (K. 4r7-v3・S. 2r21-24・D. 706b5-9・H. 301c15-20・X. 780b17-21)

論曰。⁽⁸¹⁾⁽⁸²⁾此法門。初第一品示現⁽⁸³⁾明七種功德成⁽⁸⁴⁾就。何等爲七。一者序分成就。二者衆成就。三者如來欲說法時至成就。四者依所說法⁽⁸⁵⁾隨順威儀住成就。五者依止說因成就。六者大衆⁽⁸⁶⁾欲聞現前成就。七者文殊師利菩薩答成就。

[訓読訳]

『法華論』に曰わく、「此の法門、初めの第一品は、七種の功德の成就を明かすを示現す。何等をか七と爲すや。一には、「序分成就」、二には、「衆成就」、三には、「如來欲說法時至成就」、四には、「依所說法隨順威儀住成就」、五には、「依止說因成就」、六には、「大衆欲聞現前成就」、七には、「文殊師利菩薩答成就」なり」と。

5-A-1. 解云①（七種功德成就）・開列章門、5-A-1-1. 総開、5-A-1-2. 別列

[校訂テキスト] (K. 4v3-6r6・S. 2r25-3r19・D. 706b10-707b2・H. 301c21-302b15・X. 780b22-781a2)

解云。論釋經中有二。一開列章門。二隨釋章門。初中先總開後別⁽⁸⁷⁾列。初總開中。此法門者。總舉一部之法門也。初第一品者。別約⁽⁸⁸⁾二十八品中。初第一品也。初言便足。何故復言第一品者。爲*顯*二十八品。勒爲三分。今此序品。約分在初。約品第一。兼二義故。言初第一。七種功德成就者。謂序等七事。總別隨應。皆有發生信⁽⁸⁹⁾解之功。助*顯實相⁽⁹⁰⁾功德。如所安立。不可破壞。是故名爲功德成就。別列章中。先徵後列。序分成⁽⁹¹⁾就者。如是我聞等五句。文句玩少。又是通序。是故此中。總名序分。衆成就者。依⁽⁹²⁾十地論。亦序分攝證信。六句皆通序故。⁽⁹³⁾就別義。名衆成就。教所被機。起教勝故。要因機勝劣。*顯教深淺故。伽耶山頂論。名⁽⁹⁴⁾所應聞弟子成就分者。義意亦同。爲*顯亦有通序義故。前牒經文。與序并牒。⁽⁹⁵⁾…如來欲說法時至成就者。成道來⁽⁹⁶⁾四十餘年。所以未曾說此妙法。衆生根未熟。說時未至故。

今根機*已熟。說法時至。是故先說無量義經。將爲此經之前⁽⁹⁷⁾因也⁽⁹⁵⁾。依所說法*隨順威儀住成就者。說時既至。將欲起說。必依⁽⁹⁸⁾如法⁽⁹⁹⁾隨順威儀住。以佛尊重所說法故。待⁽¹⁰⁰⁾處待衆。方起說故。此是三世諸佛。說法儀則。故名依*如法隨順威儀⁽¹⁰¹⁾因⁽¹⁰²⁾。依止說因成就者。既住順儀。雨華動地。將表內證。復放豪光。衆觀希有之瑞。皆起渴仰之念。依此欲心。而起說故。是故名爲依止說因⁽¹⁰²⁾。大衆欲聞⁽¹⁰³⁾說法成就者。前雖欲⁽¹⁰⁴⁾聞。其相未現。發言推問。欲相方現。是故名爲欲聞現前。文殊師⁽¹⁰⁵⁾利答成就者。現見過去因果相故。騰衆疑情。能決所滯。是故名彼答成就也。雖七種事皆有序義。以從通名爲序品故。然初一分從通受名。餘六皆從別義立目。如五境名⁽¹⁰⁶⁾義無所違。

〔訓読訳〕

解して云わく、『法華論』に『法華經』を釋す中、二有り。一には、^[5-A-1]「開列章門」、二には、^[5-A-2]「隨釋章門」なり。初めの中、先に^[5-A-1-1]「總開」し、後に^[5-A-1-2]「別列」す。

初めの^[5-A-1-1]「總開」の中、「此法門」とは、總じて一部の法門を擧ぐるなり。「初第一品」とは、別して二十八品を約す中、初めの第一品なり。「初」の言にて便ち足る。何が故に復た「第一品」と言うや。二十八品を顯わさんが爲めに、勸して三分⁽¹⁰⁷⁾と爲す。今、此の「序品」は、分に約せば、初めに在り、品に約せば、第一なり。二義を兼ねるが故に「初第一[品]」と言う。

^[5-1]「七種功德成就」とは、「序[分成就]」等の七事、^[5-A-1-1]總[開]・^[5-A-1-2]別[列]隨應するを謂う。皆な信解の功を發生し、實相の徳を助顯するに有り。安立する所の如く、破壊す可からず。是の故に名づけて「[七種]功德成就」と爲す。

^[5-A-1-2]「別列」章の中、先に「徵」し、後に「列」す。

^[5-1-1]「序分成就」とは、「如是我聞」等の五句⁽¹⁰⁸⁾にして、文句は玩少⁽¹⁰⁹⁾なり。又た是れ通序なり。是の故に此の中、總じて「序分[成就]」と名づく。

^[5-1-2]「衆成就」とは、『十地論』に依らば、亦た序分に證信を攝す。六句は皆な通序なるが故に。因は別義に就いて、「衆成就」と名づく。教の所被の機⁽¹¹⁰⁾、教の勝れたるを起こすが故に。要^{かなら}ず、機の勝劣に因りて、教の深淺を顯わすが故に。『伽耶山頂論』に、「所應聞弟子成就分」と名づくるは、義意亦た同じ。亦た通序の義有るを顯わさんが爲めの故に。前に經文を牒し、序と並びに牒す。

^[5-1-3]「如來欲說法時至成就」とは、成道してより來た、四十餘年、未だ曾て此の『妙法蓮華經』を説かざる所以は、衆生の根、未だ熟せず、說時未だ至らざるが故に。今、根機已に熟し、說法の時至れり。是の故に先に『無量義經』を説く。將に此の『妙法蓮華經』の前因と爲さんとするなり。

^[5-1-4]「依所說法隨順威儀住成就」とは、說時既に至り、將に説を起こさんと欲す。必ず、「依如法隨順威儀住[成就]」あるべし。佛、所説の法を尊重するを以ての故に。處を待ち、衆を待

つ。方に説を起こすが故に。此れは是れ三世の諸佛の説法の儀則なり。故に「依如法隨順威儀□住[成就]」と名づく。

^[5-1-5]「依止説因成就」とは、既に儀に順じて住す。華雨り、地動ずるは、將に内證を表わさんとす。復た[眉間白]豪[相より]光を放つ⁽¹¹¹⁾。衆、希有の瑞を觀、皆な渴仰の念を起こす。此の心を欲するに依りて、而も説を起こすが故に。是の故に名づけて「依止説因[成就]」と爲す。

^[5-1-6]「大衆欲聞説法成就」とは、前に聞かんと欲すと雖も、其の相、未だ現ぜず。言を發し推問して、相を欲するに、方に現ず。是の故に名づけて「[大衆]欲聞現前[成就]」と爲す。

^[5-1-7]「文殊師利[菩薩]答成就」とは、過去の因果の相を現見するが故に。衆の疑情に騰じて⁽¹¹²⁾、能く所滯を決す。是の故に彼の「[文殊師利菩薩]答成就」と名づくるなり。

七種の事なりと雖も、皆な序の義有り。通名に従うを以て「序品」と爲すが故に。然るに初めの一分⁽¹¹³⁾は、通に従いて名を受く。餘の六は、皆な別義に従いて目を立つ。五境⁽¹¹⁴⁾の名の如く、義に違う所無し。

5-1-1. 論曰②・序分成就

[校訂テキスト] (K. 6r6-v2 · S. 3r19-24 · D. 707b3-7 · H. 302b16-22 · X. 781a3-7)

論曰。⁽¹¹⁵⁾⁽¹¹⁶⁾又序分成就者。此法⁽¹¹⁷⁾門中示現二種勝義成就。此義應知。何等爲二。一者示現諸法門中最勝義成就。二者示現自在功德義成就。如王舍城。勝於一切⁽¹¹⁸⁾諸餘城舍。耆闍崛山勝⁽¹¹⁹⁾餘諸山。*顯此法門最勝義故。如經婆伽婆住王舍城耆⁽¹²⁰⁾闍崛山中故。

[訓読訳]

『[法華]論』に曰わく、「又た「序分成就」とは、此の法門中、二種の勝義の成就を示現す。此の義、應に知るべし。何等をか二と爲すや。一には、諸もろの法門中の最勝義の成就を示現す。二には、自在なる功德の義の成就を示現す。王舍城の、一切の諸もろの餘の城舍より勝れ、耆闍崛山の、餘の諸山より勝れたるが如きは、此の法門の最勝義を顯わすが故に。『[法華]經』の如く、「婆伽婆は王舍城の耆闍崛山の中に住したまいし」が故に」と。

5-A-2. 解云② (序分成就)・随釈章門、5-A-2-1. 牒章總標、5-A-2-2. 徴数別列、

5-A-2-3. 指事顯義

[校訂テキスト] (K. 6v2-8r5 · S. 3r24-4r19 · D. 707b8-708a18 · H. 302b23-303a16 · X. 781a8-b12)

*解云。此下隨釋。⁽¹²¹⁾釋序分中。唯釋住處。餘皆存略。文義同餘經。無別所表故。於中有四。一牒章總標。二徴数別列。三指事*顯義。四牒經重成。言又序分成就者。謂此牒章也。序分所攝住處。非但依處⁽¹²²⁾起教。亦有所表別⁽¹²³⁾⁽¹²⁴⁾義。圖*顯別義故說。又言此法門下。總標勝義。

所表義深。故勸應*知。何等爲二者。⁽¹²⁵⁾闕數也。一者*已下。別列勝義。⁽¹²⁶⁾…示現諸法門中最勝義成就者。謂妙法功德。證甚深。於⁽¹²⁷⁾諸法中。最勝義故。阿含甚深。於諸門中。最勝義故⁽¹²⁶⁾。⁽¹²⁸⁾阿故最勝。諸佛所乘。究竟乘故。過此更無餘勝法故。自在功德義成就者。謂法師功德。前是所乘法。此是能乘人。如自所證。說授與人。不待思惟。成所作事。故云。自在功德成就。如王舍下。指事*顯義。勝於一切諸餘城舍者。智度論云。⁽¹²⁹⁾有人言。閻浮提四方中。東方爲始。⁽¹³⁰⁾阿初出故。東方之中。摩伽陀國最勝。摩伽陀國中。王舍城最好。其城中。有十二億家。是中人。多聰⁽¹³¹⁾明智⁽¹³²⁾學多識。其國⁽¹³³⁾豐樂乞食易得。城在山中閑靜。精舍多故坐禪人喜住。廣如論說。今以義求。有七種勝。一名勝。王舍故。二方勝。在東故。三處⁽¹³⁴⁾勝。家多故。四住人勝。聰明人多故。五*豐樂勝。乞食易得故。六閑靜勝。在山中故。七住止勝。多精舍故。此法門亦爾。諸經中王。法門中最。廣攝諸乘。明智所住。法樂*豐饒。在⁽¹³⁵⁾涅槃山。賢聖喜住。⁽¹³⁶⁾耨闍崛山勝*餘諸山者。智度又云。⁽¹³⁷⁾⁽¹³⁸⁾問餘更有四山。鞞⁽¹³⁹⁾婆⁽¹⁴⁰⁾羅跋⁽¹⁴¹⁾等。何以多住耨闍崛山。⁽¹⁴²⁾答耨闍崛山於⁽¹⁴³⁾五山中最勝故。云⁽¹⁴⁴⁾何最⁽¹⁴⁵⁾勝。精舍近城而山⁽¹⁴⁶⁾難⁽¹⁴⁷⁾上。故雜人不來。近城故乞食不疲。⁽¹⁴⁸⁾證此法門者。⁽¹⁴⁹⁾阿爾。不捨世間而入*涅槃。入涅槃故。般若不染於世。不捨世故。大悲恒接於物。*顯此法⁽¹⁵⁰⁾門最勝義故者。*顯成勝義。餘如文。

〔訓読訳〕

解して云わく、此の下は、^[5-A-2]「隨釋[章門]」なり。序分を釋す中、唯だ住處のみを釋す。餘は皆な略を存す。文義は餘經に同じ。所表に別無きが故に。

中に於いて四有り。一には、^[5-A-2-1]「牒章總標」、二には、^[5-A-2-2]「徵數別列」、三には、^[5-A-2-3]「指事顯義」、四には、^[5-A-2-4]「牒經重成⁽¹⁵¹⁾」なり。

「又序分成就者」と言うは、謂わく、此れ^[5-A-2-1-1]「牒章」なり。序分所攝の住處は、但だ處に依りて教を起すのみに非ず。亦た所表に別義有り。別義を顯わさんが爲めの故に説く。

又た「此法門」と言う下は、^[5-A-2-1-2]「總標」の勝義なり。所表の義深きが故に「應知」を勸む。

「何等爲二」とは、^[5-A-2-2-1]「闕數」なり。「一者」已下は、^[5-A-2-2-2]「別列」の勝義なり。

「示現諸法門中最勝義成就」とは、妙法功德を謂う。證甚深は、諸法の中に於いて最勝義なるが故に。阿含甚深は、諸門の中に於いて最勝義なるが故に。阿が故に最勝なるや。諸佛所乘の究竟の乘なるが故に。此れを過ぎて更に餘の勝法無きが故に。

「自在功德義成就」とは、法師功德を謂う。前は是れ所乗の法、此れは是れ能乗の人なり。自所證の如く、授與の人に説く。思惟を待たず、所作の事を成ず。故に「自在功德[義]成就」と云う。

「如王舍[城]」の下は、^[5-A-2-3]「指事顯義」なり。

「勝於一切諸餘城舍」とは、『[大]智度論』に云わく、「有る人言わく、閻浮提の四方の中、

東方を始めと爲す。[四]初めて出づるが故に。東方の中、摩伽陀國最勝なり。摩伽陀國の中、王舍城最好なり。其の城の中、十二億の家有り。是の中の人、多く聰明にして、[五]な廣學多識なり。其の國、豐樂にして乞食して得易し。城、山中に在りて閑靜なり。精舎多きが故に坐禪の人、喜び住す」と。廣くは『[大智度]論』に説くが如し。今、義を以て求むるに、七種の勝有り。一には名勝、王舎なるが故に。二には方勝、東に在るが故に。三には處勝、家多きが故に。四には住人勝、聰明の人多きが故に。五には豐樂勝、乞食して得易きが故に。六には閑靜勝、山中に在るが故に。七には住止勝、精舎多きが故に。此の法門、亦た爾り。諸經の中の王、法門の中の最にして、廣く諸乘を攝す。明智の住する所、法樂豐饒にして、[六]の山に在るに、賢聖喜び住す。

「[七]峯嶺山勝餘諸山」とは、『[大]智度[論]』に又た云わく、「問う。餘に更に四山有り。鞞婆羅[八]怨等なり。何を以て多く耆闍崛山に住するや。答う。耆闍崛山は、五[九]の中に於いて最勝なるが故に。云何が最勝なるや。精舎は城に近く、而も山は上り難きが故に、雜人來らず。近城なるが故に乞食して疲れず」と。

「證此法門」とは、[十]た爾り。世間を捨てずして[十一]に入る。涅槃に入るが故に、般若は世に染まらず。世を捨てざるが故に、大悲は恒に物に接す。「顯此法門最勝義故」とは、勝義を成ずるを顯わす。餘は文の如し。

IV 結語

以上、本稿では、『述記』における『法華論』の「七種功德成就」の第一「序分成就」に対する注釈までの校訂テキスト並びにそれに基づく訓読訳を提示した。

とりわけ本稿では、『述記』と他疏の関係について、これまで指摘されたことのない、以下の2点について明らかにした。

- ①注(46)：常騰の散逸『法華論注』の逸文が『述記』の地の文に一致すること。
 - ②注(32)：基の『大乘法苑義林章』と『述記』が一致する文例を有すること。
- 詳しくは該当箇所の注を参照されたい。

参考文献

伊藤瑞毅

- 1983 「『法華論』より見たる『十地經論』の性格について：『法華論』の作者・訳者をも論明する」
『日蓮教團の諸問題：宮崎英修先生古稀記念』：1193-1228, 平楽寺書店

宇井伯壽

- 1938 『コンサイス佛教辭典』大東出版社

大竹晋

- 2011 『法華經論；無量壽經論；他（新国訳大藏經：14. 積經論部；18）』大蔵出版
- 奥野光賢
- 2002 『仏性思想の展開：吉蔵を中心とした『法華論』受容史』大蔵出版
- 河村孝照
- 1987 『法華經概説』国書刊行会
- 1999 「『法華論』解題」『法華文化研究』25: 1-13.
- 菅野博史
- 1995 『法華玄義(下)』第三文明社
- 1998 『法華統略 上（法華經注釈書集成6）』大蔵出版
- 木村光孝
- 1940 「法華經論に於ける二三の問題」『宗教研究』2-1: 104-141.
- 日下大癡
- 1926 「法華論に就て」『龍谷大學論叢』269: 425-489.
- 鹽田義遜
- 1943 「法華論の研究」『棲神』28: 1-48.
- 清水梁山
- 1922a 「國譯法華論開題」『國譯大藏經. 論部 第五卷』: 1-26, 國民文庫刊行會
- 1922b 「國譯妙法蓮華經優婆提舍」『國譯大藏經. 論部 第五卷』: 1-49, 國民文庫刊行會
- 昭和新纂國譯大藏經編輯部
- 1930 「法華論 一卷 元魏 勒那摩提共僧朗等譯」『昭和新纂國譯大藏經. 解説部 第二卷』: 342-343, 東方書院
- 1931 「妙法蓮華經憂婆提舍」『昭和新纂國譯大藏經. 論律部 第九卷』: 403-444, 東方書院
- 塚本啓祥
- 1985 「法華經讚頌の覚え書」『法華文化研究』11: 23-66.
- 福士慈稔
- 2011 『日本天台宗にみられる海東仏教認識（日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究；1）』身延山大学東アジア仏教研究室
- 2013 『日本華嚴宗にみられる海東仏教認識（日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究；3）』身延山大学東アジア仏教研究室
- 藤井教公, 池邊宏昭
- 2001 「世親『法華論』訳注(1)」『北海道大学文学研究科紀要』105: 21-112.
- 2002 「世親『法華論』訳注(2)」『北海道大学文学研究科紀要』108: 1-95.
- 2003 「世親『法華論』訳注(3)」『北海道大学文学研究科紀要』111: 1-70.

前川健一

- 1995 「円珍『法華論記』の引用文献：未詳文献の解明を中心に」『インド哲学仏教学研究』3: 89-103.

三友健容

- 2005 「義寂撰『法華論述記』の一考察」『大乘佛教思想の研究：村中祐生先生古稀記念論文集』: 117-156, 山喜房佛書林

Abbott, Terry Rae

- 1985 *Vasubandhu's commentary to the "Saddharmapundarika-sūtra": A Study of Its History and Significance*. Ph.D. diss. Berkeley: University of California.

金炳坤 (Kim, Byung-kon)

- 2013 「〔韓国語〕「もう一つの新羅僧侶『法華經論』注釈書について」を読んで」『忘れられた韓国の仏教思想家：新資料の発掘と思想の発見』: 297-302, 金剛大・東国大HK事業団共同国際学術大会

金天鶴 (Kim, Cheon-hak)

- 2012 「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華經論子注』について」『印度學佛教学研究』60-2: 712-719.

- 2013 「〔韓国語〕もう一つの新羅僧侶『法華經論』注釈書について」『忘れられた韓国の仏教思想家：新資料の発掘と思想の発見』: 275-286, 金剛大・東国大HK事業団共同国際学術大会

- 2014 「〔韓国語〕円弘は新羅僧侶か? : 『法華經論子注』の引用文献を中心として」『東アジア仏教文化』17: 185-208.

李起雲 (Lee, Gi-woon)

- 2002a 「〔韓国語〕新羅義寂の法華經論述記」『佛教原典研究：東国大学校仏教文化研究院』3: 139-176.

- 2002b 「〔韓国語〕新羅義寂の法華經論述記(II)」『佛教原典研究：東国大学校仏教文化研究院』4: 45-95.

朴婉娟 (Park, Kwang-yeon)

- 2013 「〔韓国語〕新羅法華思想史研究」慧眼

注

(1) 本稿は『印度學佛教学研究』第63巻に投稿中の拙稿「義寂釈義一撰『法華經論述記』について」と一部重複する。なお、〔校訂テキスト〕並びに〔訓読訳〕は立正大学大学院文学研究科博士後期課程仏教学専攻の桑名法晃氏との共同研究による成果である。

(2) 『韓仏全』には「^㉑法華經論述記^㉒卷上 ^㉓義寂釋 義一撰」【H.2 p.300 脚註^㉑】「^㉔續藏經 第一編九

- 十五套四册。】【同上②】「卷上」補入(補)。」【同上③】「底本無撰者名依東域傳燈錄書入(補)。」(H.2 p.300c, //3-4) とある。
- (3) 諸版本には「華」とあるが、甲本には「花」とあり、右に「華」と訂正し、左に傍点を付する。これと同様の訂正箇所には*印しのみを付する。以下、同じ訂正が複数ある場合には*印しのみを付する。
- (4) 「留支訳」には「妙法蓮華經^①憂波提舍卷上 大乘論師婆藪槃豆釋^② 後魏北天竺^③三藏菩提留支共沙門曇林等譯【T.26 p.1 脚註①】「憂=優(優*)【同上②】「後=元(元*)【同上③】「三藏+(法師)(法師*)」(T.26 no.1519 p.1a, //3-7) と、吉藏(549-623)撰『法華論疏』卷上(以下、『論疏』)には「妙法蓮華經優婆提舍 婆藪槃豆(此云天親)菩薩 造 三藏法師菩提流支奉 詔譯」(T.40 no.1818 p.785a, //19-21) とある。引用文中、**bold**・underlineは筆者による。以下同様。
- (5) 『述記』・『論疏』には「婆」とあるが、「留支訳」には「波」とある。
- (6) 甲本の脱字。甲本にはないが、【D.95 p.705a, //4・X.46 p.779 脚註⑥】に「舍上應有提字」(甲本の細注)と、【H.2 p.300 脚註④】に「舍上疑有提。」とあるため、「提」を補った。
- (7) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』「法師品第十」に「此經開方便門示眞實相。是法華經藏深固幽遠。無人能到。」(T.9 no.262 p.31c, //16-18) とある。
- (8) 甲本の欠字(□、以下同様)。恐らく證甚深、阿含甚深の二甚深のことであろうが、圓珍(814-91)撰『法華論記』(以下、『論記』)卷第一本に「寂徳曰。城之與山表正說中兩甚深義。」(NB.25 p.4a, //15-16) とあるため、「兩」を補った。
- (9) 甲本の欠字。定かでないが、基(632-82)撰『妙法蓮華經玄贊』(以下、『玄贊』)卷第四本に「二名法輪。法者可執持義。正見等法所成性故說名法輪。」(T.34 no.1723 p.731c, //3-4) とあり、類似する語句がみられるため、「可」を補った。
- (10) 甲本の誤字。甲本には「時」とあるが、【D.95 p.705a, //6・X.46 p.779 脚註⑦】に「時疑持」と、【H.2 p.300 脚註⑤】に「時疑持。」とあるため、「持」に訂正した。
- (11) 乙本(首欠)の始まり。
- (12) 彌勒説・玄奘訳『瑜伽師地論』卷第二十五に「云何論議。所謂一切摩^①呬^②履迦阿毘達磨。研究甚深素^③呬^④纜義。宣暢一切契經宗要。是名論議。如是所說十二分教。三藏所攝。謂或有素但纜藏攝。或有毘奈耶藏攝。或有阿毘達磨藏攝。當知此中若說契經應頌。記別諷頌。自說譬喻。本事本生。方廣希法。是名素但纜藏。若說因緣是名毘奈耶藏。若說論議是名阿毘達磨藏。是故如是十二分教。三藏所攝。」【T.30 p.419 脚註①】「呬=怛(怛*)【同上②】「履=理(理*)【同上③】「呬=怛(怛*)」(T.30 no.1579 p.419a, //1-9) とあり、本箇所依るものと考えられる。なお、基撰『大乘法苑義林章』(以下、『義林章』)卷第二(T.45 no.1861 p.278a, //11-13)にも同箇所が引かれる。ちなみに、『論疏』には「勒伽論者。即摩徳勒伽。謂解阿毘曇論。此翻爲境界。尋斯論旨能生自他利解。即生解之境界也」(T.40 no.1818 p.786a, //5-7) とある。
- (13) 乙本は破損のため、甲本の「伽言勒伽者」を欠く。

- (14) 甲・乙本の誤字。甲・乙本には「律」とあるが、「解」の誤字であるため、「解」に訂正した。
- (15) 乙本は破損のため、甲本の「或此論中攝法」を欠く。
- (16) 【十慢】『法華論』に「自此^①以下。次爲七種具足煩惱染性衆生。說七種喻。對治七種增上慢心。此義應知。又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫^②身等染慢。對治此故說三種平等。此義應知。^③(身下丹本有見字)。」【T.26 p.7 脚註③】「以=已^④」【同上 p.8 脚註②】「身=見^⑤」【同上③】「[身下…字]七字-^⑥」(T.26 no.1519 p.8a, //25-29)とあることから、これらを合したものを指すと考えられる。一方、李起雲 [2002a: 142 (n.10)] には、『摩訶止觀』の十境を指すとするが、三友健谷 [2005: 151] に「『述記』からは天台教学の片鱗さえも見いだすことはできなかった」と指摘されているように、天台の教理を以て『述記』を理解するのは無理がある。
- (17) 後掲の注(65)参照。
- (18) 甲・乙本の脱字。甲・乙本にはないが、【D.95 p.705a, //15・X.46 p.779 脚註⑧】に「眞上疑脫婆藪槃豆四字」(甲本の細注)と、【H.2 p.301 脚註①】に「「眞」上疑脫「婆藪槃豆」。」とあるため、「婆藪槃豆」を補った。
- (19) 甲本には「眞諦」とあるが、乙本には「眞帝釋」とあり、「釋」は衍字と訂正する。
- (20) 『論疏』に「妙法蓮華經優婆提舍。婆藪槃豆造。菩提留支譯。婆藪云天。槃豆云親。其人本是天帝釋之弟。釋遣其下閻浮提伏修羅。故云天親。菩提云道。留支曰希。謂道希也。」(T.40 no.1818 p.785a, //22-25)とあり、本箇所からの引用である。
- (21) 乙本は破損のため、甲本の「本是天」を欠く。
- (22) 『述記』にはないが、『論疏』の該当箇所には「帝+釋」とある。
- (23) 『論疏』に「但此論有二本。一無前序直云經云歸命一切諸佛菩薩。此是集經^①人請護之辭也。二有歸敬此是天親自作。今具依二文」【T.40 p.785 脚註④】「人=者^②」(T.40 no.1818 p.785b, //4-7)とあり、本箇所依るものと考えられる。詳しくは、後掲の注(80)参照。
- (24) 乙本には「謂」とあるが、朱筆で「論」と校正する。
- (25) 甲本にはないが、乙本には「提+門」とあり、「門」は衍字と訂正する。
- (26) 『述記』・『論疏』には「流」とあるが、【D.95 p.705a, //18・X.46 p.779 脚註⑨】に「流藏本作留次同*」(甲本の細注)と、【H.2 p.301 脚註②】に「「流」藏本作「留」次同。」とあるように、「留支訳」には「留」とある。「藏本」とは『大藏經』のことであろうが、どの版本を指すかは不明である。
- (27) 『論疏』に「^①開三分。一歸敬三寶申造論意。請威靈加護爲緣起分。二牒經解釋爲正體分。三重牒章門追示分齊爲餘勢分。就初有二。一天親歸敬申造論意。二集經者歸敬申集經意。就初^②有二。前兩偈歸敬三寶申造論意。次一偈半歸敬佛僧請威靈加護。就初又二。一通歸敬一體三寶申造論意。次別歸敬釋迦佛僧申造論意。就初又二。前半偈歸敬一體三寶。次半偈申造論意。就初又二。初兩字叙能敬之至誠。次八字歎所禮之尊極。頂禮者第一句也。」【T.40 p.785 脚註⑤】「(大)^③+開^④」【同上⑥】「有=又^⑤」(T.40 no.1818 p.785b, //7-17)とあり、本箇所依るものと考えられる。但し、前兩偈、次一偈半に二分する

など『述記』とは一致しない。

- (28) 乙本には「願」とあるが、さらに朱筆で「願」と校正する。但し、後文には「顯釋經意」とあるため、「願」の誤字である可能性がある。
- (29) 乙本には「願」とあるが、朱筆で「顯*」と校正する。
- (30) 甲本の誤字。甲・乙本には「半+一」とあるが、乙本に「一」は衍字と訂正するため、「一」を消した。
- (31) 「留支訳」に「頂禮正覺海 淨法無爲僧 爲深利智者 開示毘伽典」(T.26 no.1519 p.1a, //8-9)とある。
- (32) 法救造・僧伽跋摩等訳『雜阿毘曇心論』巻第一に「頂禮者。起善心轉愛果舉體敬禮也。」(T.28 no.1552 p.870b, //12)とあり、本箇所依るものと考えられる。なお、『義林章』巻第四(T.45 no.1861 p.316a, //26-27)にも同箇所が引かれる。前掲の注(12)での事例といい、本箇所といい、『述記』と『義林章』は関連性が窺われる。義寂は『大乘法苑義林広章』(散逸)を著しているため、彼の著作の成立順序を検討する一つの手がかりになるかも知れない。
- (33) 『述記』には「淨」とあるが、『雜阿毘曇心論』の該当箇所には「善」とある。
- (34) 『述記』には「頂」とあるが、『雜阿毘曇心論』の該当箇所には「敬」とある。
- (35) 乙本には「謂謂」とあるが、初めの「謂」は衍字と訂正する。
- (36) 乙本は破損のため、甲本の「證教法並皆」を欠く。
- (37) 乙本に「名」は添字。
- (38) 乙本も「爲」は踊り字。
- (39) 参考までに、甲・乙本には「迴」と、『統藏経』・『韓仏全』・『新統藏』には「迴」とある。
- (40) 甲本の誤字。甲本には「注」とあるが、乙本に「法」とあるため、「注」に訂正した。
- (41) 乙本に「示」は添字。
- (42) 甲本の脱字。甲本にはないが、乙本に「示+實」とあるため、「實」を補った。
- (43) 甲本の脱字。甲本にはないが、乙本に「繫+經」とあるため、「經」を補った。
- (44) 曇無讖訳『大般涅槃經』巻第五に「善男子。譬如長者唯有一子。心常憶念憐愛無已。將詣師所欲令受學。懼不速成尋便將還。以愛念故晝夜慇懃教其半字。而不教誨毘伽羅論。何以故。以其幼稚力未堪故。善男子。假使長者教半字已。是兒即時能得了知毘伽羅論不。不也世尊。…」【T.12 p.390 脚註①】「愛=慇(元)(明)(宮)」(T.12 no.374 p.390c, //15f, cf. T.12 no.375 p.630c, //26f)とあり、本箇所からの取意である。李起雲[2002a: 146 (n.21)]に『大般涅槃經』巻第6(大正蔵12, p.402上)からの取意(筆者による和訳)とするのは誤り。
- (45) 乙本は破損のため、甲本の「大乘故」を欠く。
- (46) 『述記』からの直接引用か。①安然撰(880)『悉曇藏』巻第一に「常騰法華論注云。劫初成時 摩醯首羅 與毘羯羅 和合生子。名婆藍摩。彼有四面 說四波陀。頂上有一面 說一波陀。四面所說 並是世法。

頂上所説 語深難解。世所行者 唯四波陀。後人更作六種論 解彼波陀。毘伽羅論 卽是六論之一也。解阿闍婆陀 辨聲明法也。阿闍婆陀者 是後面所説也。西方重此聲論[●]法。故經十二年 乃有通解。非初學者之所能解(文)【T.84 p.371 脚註①】「[法] + 〇」(T.84 no.2702 p.371a, //14-22) と、②濟暹 (1025-1115) 撰『辨顯密二教論懸鏡抄』卷第六に「常[●]騰僧都法花論注云。劫初成時 摩醯首羅 與毘紐 和合生子。名[●]波覽摩。彼有四面 説四波陀。頂上有一面 説一波陀。四面所説 並是世[●]法。頂上所説 語深難解。世所解者 唯四波陀(云云)【T.77 p.476 脚註②】「騰 = 勝[Ⓜ]」【同上③】「波覽 = 婆監[Ⓜ]」【同上④】「法 = 淺[Ⓜ]」(T.77 no.2434 p.476a, //8-12) と、③淨嚴撰 (1681) 『悉曇三密鈔』卷上之上に「隨緣相承且有四別 初[●]梵王相承者。劫初成時 摩醯首羅(即商羯羅初禪梵王)與毘毘劍 和合生子 名婆藍摩(略云梵)彼有四面 説四波陀(又云吠陀又云闍陀。此曰明)並是世法。後面所説名阿闍婆陀。卽聲明也。後人更造六論 解四婆陀。其一名毘伽羅論(新云毘阿羯喇拏。此云聲明記論。廣記諸法能詮卽解阿闍婆陀也)西方重此聲論。經十二年 乃有通解。非初學者之所能解(常騰法花論注)【T.84 p.720 脚註①】「傍註云南天祖承」(T.84 no.2710 p.720c, //19-25) とあり、一致する文例がみられる。なお、濟暹撰『大日經住心品疏私記』卷第九 (T.58 no.2215 p.758b, //1-4) と、頼瑜 (1226-1304) 撰『大日經疏指心鈔』卷第八 (T.59 no.2217 p.688b, //7-10) にも同様の文例がみられるが、①『悉曇藏』からの孫引きである。①～③はいずれも常騰 (740-815) の散逸『法華論注』(cf. T.55 no.2183 p.1156b, //19) からの引用である。本書は逸書ではあるものの、従来、『述記』以降に成立した文献中に、現行の『述記』と完全に一致する文例を有する文献は指摘されることがない。とくに、本箇所は『述記』の地の文にあたるため、本書の『述記』からの依拠(直接引用)を窺わしめるものがある。ちなみに、本書は『子注』を重用することが指摘(金天鶴 [2012: 715-17]) されているが、『子注』に該当文例は見当たらない。

- (47) 『韓仏全』の誤植。『韓仏全』には「糶 - 久 + 又」とある。
- (48) 乙本に「解」は添字。
- (49) 甲本にはないが、乙本には「聲 + 略」とあり、「略」は衍字と訂正する。
- (50) 諸版本の誤り。諸版本には「尊」とあるが、甲・乙本には「學」とある。
- (51) 「留支訳」に「[●]祇虔牟尼尊 及菩薩聲聞 令法自他利 略出勒伽辯 歸命過未[●]世 現在佛菩薩 弘慈降神力 願施我無畏 大悲止四魔 護菩提增長」【T.26 p.1 脚註④】「祇 = 祈[Ⓜ]」【同上⑤】「世 = 來[Ⓜ]」(T.26 no.1519 p.1a, //10-14) とある。
- (52) 『韓仏全』の誤植。『韓仏全』には「虔 - 文 + 父」とあるが、甲本・乙本・『続藏経』・『新続藏』には「虔」とある。但し、「留支訳」には「虔」とある。
- (53) 諸版本の誤り。諸版本には「竟」とあるが、甲・乙本には「意」とある。
- (54) 甲・乙本の誤字。甲・乙本には「比」とあるが、「此」の誤字であるため、「𠄎」に訂正した。
- (55) 乙本には「源陀陀」とあるが、初めの「陀」は衍字と訂正し、後の「陀」は「隱」に訂正する。
- (56) 【若正応云】この表現は、義寂述『菩薩戒本疏』巻下之本 (T.40 no.1814 p.671a, //23-25) に 2 例みられる。

- (57) 乙本には「智」とあるが、朱筆で「知^{*}」と校正する。
- (58) 『統藏經』・『新統藏』の誤り。『統藏經』・『新統藏』には「巳」とあるが、甲・乙本には「巳^{*}」とある。但し、『韓仏全』は『統藏經』に従わずに左の如く訂正する。
- (59) 【対揚】文殊、弥勒、舍利子等のこと。「佛説法の會座に於て佛に問答等を發して利益を成辨するをいふ。」(宇井伯壽 [1938: 687])。
- (60) 【三賢十聖】「十住・十行・十廻向の三賢と初地乃至十地の十聖とをいふ。」(宇井伯壽 [1938: 349])。
- (61) 【登地菩薩】「初歡喜地の位に入りし菩薩」(宇井伯壽 [1938: 773])。
- (62) 【毘伽羅】「vyākaraṇa. 譯、聲明記論。十八大經の中、六論の一。また五明の一。文法に關する印度俗書の名」(宇井伯壽 [1938: 884])。
- (63) 【四皮陀】「『四皮陀』は、バラモン教の四種のヴェーダ聖典で、リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダのこと。皮陀は、Vedaの音写語。偉陀とも音写する」(菅野博史 [1998: 407 (n.213)])。詳しくは、吉藏撰『百論疏』(T.42 no.1827 p.251a, //22-26) 参照。
- (64) 【六通の礼】不明。
- (65) 【本母】「摩怛理伽 māṭṛkā の譯。論藏をいふ。本母は出生の義、諸經の義を集め之を論議して別趣の義理を出生する意」(宇井伯壽 [1938: 987])。
- (66) ^[4-3]「後一頌半」は、詳解せず、この一文を以て省略する。
- (67) 乙本に「是」は添字。
- (68) 乙本に「論」は添字。
- (69) 【D.95 p.706a, //16・X.46 p.780 脚註①】に「須疑卽」と、【H.2 p.301 脚註③】に「『須』疑『卽』。」とある。
- (70) 乙本に「下」は朱筆で校正した添字。
- (71) 参考までに、甲本・乙本・『統藏經』・『新統藏』には「纏」と、『韓仏全』には「纏」と、「韓國佛教全書檢索」・「CBETA中華電子佛典協會」には「纏」とある。
- (72) 甲本の脱字。甲本にはないが、乙本に「第十二」とあるため、「㊦」を補った。
- (73) 乙本の誤字。乙本には「願」とあるが、甲本には「顯」とある。
- (74) 甲本には「知」とあるが、乙本には「智」とある。
- (75) 「留支訳」に「^⑥妙法蓮華經序品第一 如是我聞一時佛^⑦住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。」【T.26 p.1 脚註⑥】「妙法蓮華經」-㊦【同上⑦】「住=在㊦」(T.26 no.1519 p.1a, //15-17) とある。
- (76) 『論疏』に「經曰歸命一切諸佛菩薩者。此第二集經者請護之辭。經曰歸命一切諸佛菩薩 前歸敬申造論意請威靈加護。此歸敬集經者欲出佛經。亦請威靈加護。一切衆經皆^⑧並有於此辭。但隨寄一文示存略故也」【T.40 p.786 脚註⑤】「並=應^⑧」(T.40 no.1818 p.786a, //17-22) とあり、本箇所依るものと考えられる。
- (77) 乙本の誤字。乙本には「首」とあるが、甲本には「者」とある。

(78) 【二分】「七種功德成就」の第一「序分成就」を一分とし、余の六成就を一分とする、この二分のこと。

(79) 【牒】引用して記すこと。

(80) 【經曰歸命】『論疏』によれば、『法華論』には、前序がなく、直ちに「經云歸命一切諸佛菩薩」という一文から始まるテキスト（以下、**㉑**）と、現行の「留支訳」のように、天親の帰敬頌を有するテキスト（以下、**㉒**）の二本があるとす。以下、該当箇所（T.40 no.1818 p.785b, //4-11, p.786a, //17-22）の訓読訳を示し、**㉑**について考察する。

〔訓読訳〕

但だ此の論に**二本**有り。**㉑**一には、**前序**無し。直ちに「經云歸命一切諸佛菩薩」と云う。此れは是れ集經人の請護の辭なり。**㉒**二には、**歸敬**有り。此れは是れ天親の自作なり。今は具さに**二文**に依りて開いて三分とす。一には、**三寶**に歸敬し、造論の意を申べ、威靈加護を請う。緣起分と爲す。…初めに就いて二有り。一には、**天親の歸敬**、造論の意を申ぶ。二には、**集經者の歸敬**、集經の意を申ぶ。…「經曰歸命一切諸佛菩薩」とは、此れ第二の集經者の請護の辭なり。「經曰歸命一切諸佛菩薩」前の歸敬は、造論の意を申べ、威靈加護を請う。此の歸敬は、集經者の佛經を出ださんと欲し、亦た威靈加護を請う。一切衆經は、皆な並びに此の辭有り。但だ一文に寄せて隨つて、略を存するを示すが故なり。

【二本】これについては二説（**㉑**＝「摩提訳」、**㉒**＝「留支訳」、**㉑**≠「留支訳」、**㉒**＝「留支訳」）が提示されている。

塚本啓祥 [1985: 62] には「前者は勒那摩提等訳に、後者は菩提留支等訳に相応する」とあり、**㉑**は「摩提訳」、**㉒**は「留支訳」とみなす。しかし、現行の「摩提訳」に**㉑**の一文は見当たらない（**㉑**≠「摩提訳」）。と言うより、『論疏』は「摩提訳」については一切語らない。この問題を回避するためか、続けて「恐らく吉藏所見の『法華論』はいずれも上記の文を引用していたものとみなされる」とあるが、**㉒**の説明に**㉑**の一文が言及されない以上、推測の域を出ないと言わざるを得ない。

大竹晋 [2011: 108] には「吉藏は菩提流支訳について二つの系統のテキストがあったことを伝えている」とあり、二本とも「流支訳」とみなし、続けて「第一のテキスト……前序あり（帰敬頌なし）。「經云。歸命一切諸佛菩薩」から始まる。第二のテキスト……帰敬頌あり（前序なし）。このうち、第二のテキストが菩提流支訳の現行本に該当する」（引用文中、「前序あり」は「前序なし」の誤り）とあり、**㉒**を「留支訳」とする。ちなみに、「留支訳」については、栖復集（879）『法華經玄贊要集』卷第六に「問本論幾譯。答兩譯。一法華論一卷。梁武帝代。中天竺國三藏勒那摩提。於洛陽殿內譯。侍中崔光筆授。出長房錄。二法華論一部兩卷。二十九紙。後魏菩提留支譯。曇林筆授。今此本一卷。疏依魏論。以釋秦經（下解疏）。」（X.34 no.638 p.292c, l.22 - p.293a, l.2）とあるように、確かに**卷数を異にする二つのテキスト**が世に行われていたようである。「流支訳」を二本とするところは、恐らくこの点に着眼したからであろう。しかし、『論疏』の言わんとするところは、あくまでも**㉑**、**㉒**の構成上の相違に限る。ついては、**㉑**、**㉒**のどちらかを「留支訳」に帰せしめるためのものではない。従つて（**㉒**＝「留支訳」という推論は、

論点から外れ、かつ状況証拠に基づいた拡大解釈に過ぎないと言わざるを得ない。

参考までに、『論疏』において示される①、②の構成と、諸本の構成をまとめると下表のとおりである。

なお、①などの記号は諸本における順序を示す。

構成	I 前序	II 頂礼…	III 歸命一切…	IV 序品第一	V 如是我聞…	VI 此[經]法門…
①	×	-	①	-	-	-
②	-	○	-	-	-	-
「摩提訳」	×	×	×	×	①	②
「留支訳」	×	①	×	②	③	④
『論疏』	×	①	②	③	④	⑤
『子注』	首欠	①	②	×	③	④
『述記』	×	①	③	×	②	④
『論記』	×	①	③	②	④	⑤

②の説明に、IIの帰敬頌以外の項目についてはまったく言及されないために、厳密には諸本とは比較し得ないものの、IIの帰敬頌を有することを以て現行の「留支訳」に比定しようというのであれば、必ずしも否定されるものではなかろう。また、IIIの①の一文は、現存する主な『法華論』末註のすべてにおいて見出される（但し、『述記』は『論疏』からの孫引きと考えられる）ために、現行の二訳とは構成を異にするテキストが流行していたことが予測される。ただ、現に伝わるテキストの有無については確かな情報を得ていない。しなしながら、清水梁山 [1922b: 2] には「經に曰く、「歸命したてまつる一切の諸佛菩薩。」とあり、①の一文が訳されている。いずれにしても、①については不明とせねばならない。

【前序】費長房撰（597）『歴代三寶紀』卷第九に「妙法蓮華經論二卷（曇林筆受并製序）」（T.49 no.2034 p.86a, l.22）とあり、曇林の序（散逸）を指すものと考えられる。

【二文】天親の帰敬、集経者の帰敬のこと。

【天親の帰敬】「頂禮正覺海…護菩提增長」、後続の前の帰敬のこと。

【集経者の帰敬】「歸命一切諸佛菩薩」（*namaḥ sarva-buddha-bodhisatvebhyaḥ*）、後続の此の帰敬のこと。

(81) 「留支訳」に「釋曰。此經法門。初第一品示現七種功德成就。此義應知。何等爲七。一者序分成就。二者衆成就。三者如來欲說法時至成就。四者依所說法威儀隨順住成就。五者依止說因成就。六者大衆現前欲聞法成就。七者文殊師利菩薩答成就。」（T.26 no.1519 p.1a, l.29 - p.1b, l.5）とあり、『述記』所依の「流支訳」と語句の相違がみられる。一方、「摩提訳」には「^①此法門中初第一品明七種功德成就。^②何等爲七。一者序分成就。二者衆成就。三者如來欲說法時至成就。四者所依說法隨順威儀住成就。五者依止說因成就。六者大衆^③現前欲聞法成就 七者文殊師利答成就。」【T.26 p.10 脚註^④】「此法門中= 釋曰此法門

- ㊦㊧【同上15】「(應知) + 何㊦㊧【同上19】「現前欲聞法 = 欲聞現前㊦」(T.26 no.1520 p.10c, //19-24) と、『論疏』には「論曰此[㊦]經法門[㊦]中初第一品[㊦]示現七種功德成[㊦]就…何等爲七 一者序分成就 二者衆成就 三者如來欲說法時至成就 四者[㊦]依所說法[㊦]威儀隨順住成就 五者依[㊦]上說因成就 六者大衆欲聞法現前成就 七者文殊師利答成就」【T.40 p.787 脚註6】「[經]’ - 原」【同上6】「[中]’ - 原」【同上7】「示現 = 明’原」【同上8】「就 + (此義應知)’原」【同上12】「依所 = 所依’原」【同上15】「威儀隨順 = 隨順威儀’原」【同上14】「上 = 止’原」(T.40 no.1818 p.787a, //12-13, //19-22) とある。諸資料の、とくに、四、六、七は、語句の相違がみられる。
- (82) 『述記』にはないが、「留支訳」には「此 + 經」とある。
- (83) 『述記』には「明」とあるが、【D.95 p.706b, l.5 · X.46 p.780 脚註2】に「藏本無明字」(甲本の細注) と、【H.2 p.301 脚註4】に「即明藏無。」(「明」藏本無の誤り) とあるように、「留支訳」にはない。但し、「摩提訳」にはある。
- (84) 『述記』にはないが、【D.95 p.706b, l.5 · X.46 p.780 脚註3】に「就下有此義應知四字」(甲本の細注) と、【H.2 p.301 脚註5】に「就」下有「此義應知。」とあるように、「留支訳」には「就 + 此義應知」とある。
- (85) 『述記』には「隨順威儀*」とあるが、「留支訳」には「威儀隨順」とある。但し、「摩提訳」には「隨順威儀」とある。
- (86) 『述記』には「欲聞現前」とあるが、【D.95 p.706b, l.8 · X.46 p.780 脚註4】に「欲聞現前藏本作現前欲聞法」(甲本の細注) と、【H.2 p.301 脚註6】に「欲聞現前藏本作現前欲聞法。」とあるように、留支訳には「現前欲聞法」とある。
- (87) 乙本に「列」は添字。
- (88) 甲・乙本には「廿」とあるが、〔校訂テキスト〕では「二十*」に統一した。
- (89) 乙本には「律」とあるが、朱筆で「解*」と校正する。
- (90) 諸版本の誤り。甲本は破損のため判読し難く、諸版本には「功」とあるが、乙本に「之」とあるため、[] に訂正した。
- (91) 乙本の誤字。乙本には「孰」とあるが、甲本には「就」とある。
- (92) 【十地論】詳細不明。現行の『十地經論』に該当文例は見当たらない。但し、慧遠撰(523-92)『十地義記』卷第一本に「經序有二一發起二證信如來將說先現諸相爲說之由名爲發起阿難稟化欲傳已開對未來人先云如是我從佛聞證成可信名證信」(X.45 no.753 p.24c, //13-16) と、寶藏写『十地義記』卷第一に「與大菩薩俱者。證信序中第六句明同聞衆」(T.85 no.2758 p.236b, //1-2 · P.2048) とあり、類似する語句がみられる。
- (93) 甲本の誤字。甲本には「令」とあるが、乙本に「今」とあるため、[] に訂正した。
- (94) 天親菩薩造・菩提流支訳『文殊師利菩薩問菩提經論』卷上に「此修多羅所攝有九分。一序分。二所應聞弟子成就分。三三昧分。四能觀清淨分。五所觀法分。六起分。七說分。八菩薩功德勢力分。九菩薩

- 行差別分。」(T.26 no.1531 p.328a, //19-22)とある。ちなみに、智昇撰(730-)『開元釋教錄』卷第十九に「文殊師利菩薩問菩提經論二卷(一云文殊問菩提經論一云伽耶山頂論經)三十紙」(T.55 no.2154 p.689c, //5-6)とある。
- (95) 「和上③」(K. 35v6-36r1)と同文。
- (96) 甲・乙本には「卅」とあるが、諸版本に倣い、〔校訂テキスト〕では「四十」に統一した。
- (97) 甲・乙本の誤字。甲・乙本には「北」とあるが、【H.2 p.302 脚註①】に「北」疑「兆」(𠄎)とあるように、「兆」の誤字であるため、「𠄎」に訂正した。
- (98) 『述記』には「論曰①」の「所説」に入れ替わり「如*」とある。
- (99) 甲・乙本の脱字。「論曰①」には「隨順」とあるが、ここでは「隨」を欠くため、「隨」を補った。
- (100) 乙本に「處待」は添字。
- (101) 甲・乙本の脱字。前文には「依如法隨順威儀住」とあるが、ここでは「住」を欠くため、「住」を補った。
- (102) 「和上⑦」(K. 41v8-42r2)と同文。
- (103) 甲本には「論曰①」の「現前」に入れ替わり「説法」と、乙本には「説前」とあるが、朱筆で「前」を「法」と校正する。
- (104) 甲本の誤字・諸版本の誤り。甲本には「問」とあり、諸版本には「問」とあるが、乙本に「聞」とあるため、「聞」に訂正した。
- (105) 『述記』の「論曰①」には「利+菩薩」とあるが、ここでは「菩薩」を欠く。ちなみに、「摩提訳」・『論疏』にも「菩薩」を欠く。
- (106) 甲本にはないが、乙本には「義+以」とあり、「以」は衍字と訂正する。
- (107) 【三分】^[5-1]「教起因縁分」、^[5-2]「方便分」、^[5-3]「実相分」のこと。
- (108) 【五句】一般的に通序とは、『妙法蓮華經』で言えば、「如是(①信)、我聞(②聞)、一時(③時)、佛(④主)、住王舍城耆闍崛山中(⑤處)、與大比丘衆(⑥衆)」(T.9 no.262 p.1c, //19-20)の六句(六成就)に分かつが、ここでは「與大比丘衆」を除く前五句を指すものと考えられる。
- (109) 【玩少】吟味し得ないほどに少ないという意か。
- (110) 【所被機】「教化を受くべき機根の衆生」(宇井伯壽 [1938: 531])
- (111) 『妙法蓮華經』「序品第一」に「佛放眉間白毫相光」(T.9 no.262 p.2b, //16-17, p.4a, //18)とあるため、語句を補った。
- (112) 【騰】「乗ること」(菅野博史 [1995: 937 (n.4)])。
- (113) 【初めの一分】「序分成就」のこと。
- (114) 【五境】詳細不明。五つの感覚器官の対象である色・声・香・味・触の五つを指すか。
- (115) 「留支訳」に「序分成就者。此法門中示現二種勝義成就。此義應知。何等爲二。一者示現諸法門中最勝義成就。二者示現自在功德義成就。如王舍城。勝於一切諸餘城舍。耆闍崛山勝餘諸山。顯此法門最

勝義故。如經婆伽婆住王舍城耆闍崛山中故。」(T.26 no.1519 p.1b, ll.6-11)とあり、『述記』所依の「流支訳」と一字異なる。一方、「摩提訳」には「又序分成就者。此法^㉑門示現二種義成^㉒就。何等爲二。二者^㉓示現一切諸法門中最^㉔勝成就故。二者示現自在功^㉕德成就故。如王舍城。勝^㉖餘一切城舍故。耆闍崛山勝餘諸山^㉗故。如經^㉘如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故。」【T.26 p.10 脚註^㉙】「門+(中)㉑【同上^㉒】「就+(此義應知)㉓【同上^㉔】「[示現]-㉕【同上^㉖】「勝+(義)㉗【同上 p.11 脚註^㉘】「德+(義)㉙【同上^㉚】「(於諸)+餘㉛【同上^㉜】「故+(顯此法最勝義故)㉝【同上^㉞】「如是我聞一時=婆伽婆㉟(T.26 no.1520 p.10c, ll.24 - p.11a, ll.3)と、『論疏』には「又序分成就者…此法門中示現二種勝義成就 應知 何等爲二 一者示^㉑現諸法門中^㉒最勝義成就故 二者示現自在功德義成就故 如王舍城 勝於諸餘一切城舍^㉓耆闍崛山勝餘諸山^㉔故…如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故」【T.40 p.787 脚註^㉕】「現+(一切)^㉖【同上^㉗】「[最勝]^㉘-^㉙【同上^㉚】「(故是故)^㉛+耆^㉜【同上^㉝】「[故]^㉞-^㉟」(T.40 no.1818 p.787a, ll.28, p.787b, ll.5-8, p.787c, ll.24-25)とある。ちなみに、本箇所『論疏』所引の『法華論』は「摩提訳」に近似する。

- (116) 『述記』には「又」とあるが、【D.95 p.707b, ll.3・X.46 p.781 脚註^㉑】に「藏本無又字」(甲本の細注)と、【H.2 p.302 脚註^㉒】「又」藏本無。」とあるように、「留支訳」にはない。但し、「摩提訳」・『論疏』にはある。
- (117) 乙本の誤字。甲・乙本には「聞」とあるが、甲本は「門」に訂正する。
- (118) 乙本の誤字。甲・乙本には「法」とあるが、甲本は「諸」に訂正する。
- (119) 甲・乙本の誤り。甲・乙本には「諸餘」とあるが、「留支訳」の該当箇所には「餘諸」とあるため、「餘諸^{*}」に訂正した。
- (120) 甲本の誤り。甲・乙本には「闍闍」とあるが、乙本は反転記号で「闍闍」と訂正し、「留支訳」の該当箇所にも「闍闍」とあるため、「闍闍^{*}」に訂正した。但し、諸版本は断らずに左の如く訂正する。
- (121) 乙本も「釋」は踊り字。
- (122) 乙本には「起起」とあるが、後の「起」は衍字と訂正する。
- (123) 乙本も「義」は添字。
- (124) 甲本の脱字。甲本にはないが、乙本に「義+爲」とあるため、「爲」を補った。
- (125) 甲本の誤字。甲本には「微」とあるが、乙本に「微」とあるため、「微」に訂正した。
- (126) 『述記』からの取意^㉑。前掲の注(46)において指摘したように、かつて現行の『述記』と完全に一致する文例を有する文献は指摘されたことがない。但し、前川健一 [1995: 90] に「『述記』はこの中の「諸法門中最勝義成就」を注釈して、これを「妙法の功德」とし、それをさらに『法華論』方便品釈にあらわれる「證甚深」と「阿含甚深」に関連づけている。『論記』所引の文はこれを要約して「寂徳曰。城之與山表正説中兩甚深義」と述べているのである(なお、円珍の『授決集』「教證二道決二十九」にも「義一師等云。序分中二種成就表顯方便品證甚深阿含甚深」(智全上372a-11~13)とある。)とあり、その間接引用ないし取意として本箇所が、円珍の『論記』・『授決集』に要約されていることが指摘され

- ている。
- (127) 乙本に「諸」は添字。
- (128) 甲本の誤字。甲本には「阿」とあるが、乙本に「何」とあるため、「阿」に訂正した。但し、諸版本は断らずに左の如く訂正する。
- (129) 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』卷第三に「^㉑復次閻浮提四方中。東方爲^㉒始。日初出故。次第南^㉓方西^㉔方北方。東方^㉕中摩伽陀國最勝。摩伽陀^㉖國中王舍城最^㉗勝。是中有十二億家。…復次是中人多聰明皆廣學多識。餘國無此。…復次^㉘其國豐樂乞食易得。餘國不如。…復次王舍城在山中閑靜。餘^㉙國精舍平地故。多雜人入出來往易故不閑^㉚靜。又^㉛此山中多精舍。諸坐禪人諸聖人皆^㉜樂^㉝閑靜多得住^㉞中。佛是聖人坐禪人主。是故^㉟多住王舍城。^㊱如是等種種因緣^㊲故多住王舍城。」【T.25 p.78 脚註^㊳】「復次=有人言^㊴【同上^㊵】「始日初=數始以日^㊶【同上^㊷】「[方]-^㊸【同上^㊹】「(之)+中^㊺【同上^㊻】「[中]-^㊼【同上^㊽】「[國]-^㊾【同上^㊿】「勝是=好其城[㋀]【同上[㋁]】「其=摩伽陀[㋂]【同上[㋃]】「國+(土)[㋄]【同上[㋅]】「靜+(佛樂閑靜處以是故多住王舍城)[㋆]、(佛樂閑靜處以是故多住王舍城住)[㋇]【同上[㋈]】「[此山中多精舍諸]-[㋉]【同上[㋊]】「樂=喜[㋋]【同上[㋌]】「[閑靜多得]-[㋍]【同上[㋎]】「中=山[㋏]、(山)+中[㋐]【同上[㋑]】「[多]-[㋒]【同上[㋓]】「[如是…城]十三字-[㋔]【同上[㋕]】「[故多]-[㋖]、故多=多故[㋗] (T.25 no.1509 p.78a, l.13 - p.78b, l.20) とある。
- (130) 甲本の誤字。甲本・『統藏經』・『新統藏』には「日」とあるが、乙本・『大智度論』の該当箇所には「日」とあるため、「日」に訂正した。但し、『韓仏全』は『統藏經』に従わずに左の如く訂正する。
- (131) 『述記』の脱字。『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所には「明+皆」とあるため、「明」を補った。
- (132) 乙本には「享」とあるが、朱筆で「學」と校正する。
- (133) 参考までに、甲本・乙本・『韓仏全』には「豊」と、『統藏經』・『新統藏』には「豊*」とある。
- (134) 乙本に「勝」は添字。
- (135) 甲・乙本には「炎」とあるが、「涅槃」の略字 (cf. S. 7r28) であるため、「涅槃*」に訂正した。
- (136) 甲本の誤字。甲本には「者」とあるが、乙本・『留支訳』の該当箇所には「者」とあるため、「者」に訂正した。
- (137) 『大智度論』卷第三に「問曰。餘更有四山。鞞婁羅跋怛等。何以^㉑不多住。而多^㉒住者閻崛^㉓山。答曰。者閻崛山於五山中最勝故。云何勝。者閻崛山精舍近城而山難上。以是故雜人不來。近城故乞食不疲。^㉔以是故佛多在者閻崛山中。不^㉕在餘處。」【T.25 p.78 脚註^㉖】「山+(中)^㉗【同上^㉘】「[不多住而]-^㉙【同上^㉚】「住=在^㉛【同上^㉜】「[以]-^㉝【同上^㉞】「在=多住^㉟、=住^㊱ (T.25 no.1509 p.78b, ll.22-27) とある。
- (138) 『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所には「問+日」とある。
- (139) 『述記』の衍字。『述記』には「婆羅婆羅」とあるが、『大智度論』の該当箇所には「婆羅」とあるため、「婆羅」に訂正した。

- (140) 『述記』の脱字。『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所「羅+跋」とあるため、「𨮑」を補った。
- (141) 『述記』の衍字。『述記』には「等等」とあるが、『大智度論』の該当箇所「等」とあるため、「等」に訂正した。
- (142) 『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所には「答+曰」とある。
- (143) 『述記』の脱字。『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所「五+山」とあるため、「𨮑」を補った。
- (144) 『述記』には「何+最」とあるが、『大智度論』の該当箇所にはない。
- (145) 『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所には「勝+耆闍崛山」とある。
- (146) 『述記』の衍字。甲・乙本には「難上難上」とあるが、乙本は取り消し線で「難上難上」と訂正し、『大智度論』の該当箇所にも「難上」とあるため、「難上」に訂正した。
- (147) 『述記』にはないが、『大智度論』の該当箇所には「上+以是」とある。
- (148) 『述記』には「留支訳」の「顯」に入れ替わり「證」とある。
- (149) 甲・乙本の誤字。甲・乙本には「品」とあるが、「亦」の誤字であるため、「𨮑」に訂正した。
- (150) 甲・乙本の誤字。甲・乙本には「以」とあるが、「留支訳」の該当箇所に「門」とあるため、「𨮑」に訂正した。
- (151) ^[5-A-2-4]「牒經重成」は、名目のみが記され、解説は見当たらない。

【キーワード】

海東仏教、吉蔵、円弘、常騰、円珍、法華章疏、『法華論』、
『法華論疏』、『妙法蓮華經論子注』、『法華論注』、『法華論記』